

第10講座 古文(2)

■ 要点のまとめ ■

(1) 省略される言葉

① 主語

古文では、主語が省略されることがよくあるため、それを適切に補って読むことが大切である。また、主語が明示されなのまま、一文の中で動作主が変わっていることもある。現代語訳が書かれている場合は、それを参考にして、だれが何をしたのかをきちんと押さえて読むようにする。

② 助詞

助詞の「が・は・を」が省略されることが多い。
・「竹取の翁たけとりのおきなといふもの(が)ありけり」

(2) 会話文

話し言葉の終わりは「……と(いふ)」などという形になっていることが多いので、引用を表す「と」に着目して会話文をとらえる。

(3) 係り結びの法則

文中に強意や疑問などの意味を表す「係りの助詞」があると、文末の形が変化する。係りの助詞と文末の結び方との関係を「係り結び」という。

- ① ぞ・なむ・や・か：受ける言葉(結び)は連体形になる。
- ・「名をば、さぬきのみやつことなむいひける」
- ② こそ…：受ける言葉(結び)は已然形になる。
- ・「あやしうこそものぐるほしけれ」

助動詞

(1) 次の——線部を漢字に書き直しなさい。

① 日ひがくれる。

〔 〕

② 事態じたいをしゅうしゅうする。

〔 〕

③ 八百屋やちやうをいとなむ。

〔 〕

④ あんあびんをかくんする。

〔 〕

⑤ 洗濯物せんたくものをほす。

〔 〕

⑥ 図ずをかくだいする。

〔 〕

(2) 次の各文から助動詞を書き抜きなさい。

① 私がご案内します。

② 海で泳ぎたい。

③ 弟は心配そうに見つめて

いる。

④ 読み終わったら片づけて

ください。

① ()

② ()

③ ()

④ ()

(3) 次の——線部の「れる・ら

れる」の意味をあとから選

びなさい。

① 先生せんせいがお話をされる。

② 昔むかしのことが思い出される。

③ 先生せんせいにほめられる。

④ 東京とうきょうでも星が見られる。

ア 尊敬

イ 可能

ウ 受け身

エ 自発

① ()

② ()

③ ()

④ ()

★印は、単元内容に特に関連する問題です。

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕 園別当入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人、别当入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかがとためらひけるを、别当入道さる人にて、この程百日の鯉をきり侍るを、今日欠き侍るべきにあらず。まげて申し請けんとてきられける、いみじくつきづきしく、興ありて人ども思へりける、或る人、北山太政入道殿にかたり申されたりければ、「かやうの事、己はよにうるさく覚ゆるなり。『きりぬべき人なくは、給べ。きらん』と言ひたらんは、なほよかりなん。何条、百日の鯉をきらんぞ」とのたまひたりし、をかしく覚えしと人の語り給ひける。いとをかし。

(兼好法師 『徒然草』)

〔現代語訳〕 園別当入道は、無類の料理の達人である。ある人のところで、すばらしい鯉を出したので、その座にいた人がみな、別当入道の包丁さばきを見たいものだと思つたが、(相手が身分のある人なので)軽々しく口に出すというのもどうかと思つてためらつていたところが、別当入道はよく人の気持ちを察する人であつて、このごろ百日の鯉を切る願を立てておりますので、今日一日だけ欠かすわけにはいきません。ぜひ(私に)切らせてくださいと言つて(その鯉を)お切りになつたのは、きわめてその場にふさわしく、おもしろいものだと人々が思つたことであると、ある人が、北山太政入道殿にお話し申し上げたところ、「このようなことは、私は非常にわずらわしく感じることだ。『切るのに適当な人がいなければ(私に)ください。切りましょう』と言つたとしたら、きつといつそうよいことであろう。どうして、百日の鯉を切っているからなどと言う必要があるのか」とおっしゃつたことは、おもしろいことだと思われた、と人がお話しになつた。(この話を聞いた自分にも)たいへんおもしろく思われる。

★問一 園別当入道が話した会話の部分^ぬを古文中から探し、その初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

□
□
□

問二 線①「かやうの事」とは、どのようなことですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 園別当入道が、百日の間毎日、鯉の料理を続けるという願をかけて、それをきちょうめんに実行していること
- イ 園別当入道が、鯉の料理をしたくてたまらなかつたので、機転をきかした客が、鯉の料理をさせてやったこと
- ウ 園別当入道が、一座の人の気持ちを察して、わざとらしい理由をつけて鯉を料理したこと
- エ 園別当入道が、一座の人を驚かせるために、大きな鯉を持って来て、大げさな態度で鯉を料理したこと

★問三 線②「のたまひたりし」の動作主を次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 園別当入道
- イ 別当入道の包丁さばきを見た人
- ウ 北山太政入道
- エ 筆者

問四 線③「きわめてその場にふさわしく」とありますが、これは古文ではどの言葉にあたりますか。古文中から書き抜きなさい。

□
□

練習問題

1 次の古文と解説を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕 すぐめの子を秘蔵して飼ひたるに、呼べば、いづくに行きてもその声にしたがひて来るなり。いづくにゐても我が姿を見知りて肩にとまるに、すぐめながらもようなじむに、かはゆう覚えしが、夕べねずみに取られたれば、けふは呼べど来ず。誠に、ふびんさに涙のこぼるるといふ人、もつとものことなり。余も、昔、十のときに、すぐめを飼ひて今のやうになじみしに、とびのために取られしより、その後は飼はぬなり。

(柳沢淇園『ひとりね』)

*1秘蔵して〓大切にかわいがって。 *2いづくに〓どこに。

*3かはゆう〓かわいらしく。 *4夕べ〓昨夜。

〔解説〕 この文章は、なついていたすぐめの子をねずみに取られて、たいてい悲しがつていた人を見て、筆者自身が十歳のとき、やはりなついていたすぐめをとびにさらわれたときの経験から大いに同情した話である。子供のころの経験が、はるか時間を隔てて思い起こされ、〓という、相手の気持ちに同情した言葉となつて表れたのである。文人であり、かたわら画家でもあつた淇園の繊細な心情と高雅な人柄を偲ばせる一節である。

★問一 線①「呼(ぶ)」とありますが、だれ(何)が、だれ(何)を呼ぶのですか。

〔 〕が、〔 〕を。

問二 線②「今のやうに」を言い換えたものとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 今どきの人たちをまねて

イ 今になってやつと

ウ 今も心に残っているように

エ 今の話のように

問三 線③「その後は飼はぬなり」とありますが、なぜ筆者は飼わなくなつてしまったのですか。次の〔 〕にあてはまる言葉を古文中から三字で書き抜きなさい。

とびに取られたすぐめを

〔 〕

に思ったから。

問四 〔 〕にあてはまる言葉として最も適当なものを、古文中から九

字で書き抜きなさい。

〔 〕

2 次の古文と解説を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕 あるじの云ふ、是より出羽の国に大山を隔てて道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人を頼み侍れば、究竟の若者反脇指をよこたへ、櫛の杖を携へて我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にも逢ふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行く。あるじの云ふにたがはず、高山森々として一鳥声きかず、木の下闇茂りあひて夜行くがごとし。雲端に土ふる心地して、篠の中踏み分け踏み分け、水をわたり岩につまづきて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをこの云ふやう、此の道必ず不用の事あり、つつがなう送りまゐらせて仕合はせしたりと、よろこびてわかれぬ。あとに聞きてさへ胸とどろくのみなり。

(松尾芭蕉『奥の細道』)

- * 1 究竟の 〓 力強そうな。 * 2 よこたへ 〓 腰にさして。
- * 3 高山森々として一鳥声きかず 〓 高山は樹木におおわれていて、鳥の声一つきこえない。

* 4 雲端に土ふる 〓 雲の端から砂塵が降ってくるような。

* 5 不用の事 〓 不都合。困ったこと。

* 6 胸とどろくのみなり 〓 ぞつとするばかりである。

〔解説〕 「奥の細道」中の最難所、出羽越えを記した段である。作者は屈強な若者を道案内に立て、無事最上の庄に出たが、通ってきた道は当時は盗賊が多かったので、旅人が危険視していた。 〓 という言葉には、作者のこの道を行こうとするときの恐れがよく表れている。

★ 問一 —— 線部「かの案内せしをのこ」とありますが、これと同じ人物を表している言葉を、古文中から五字で書き抜きなさい。

--	--

問二 〓 にあてはまる言葉を古文中から十八字で書き抜きなさい。

--	--

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある人、寺へ参りて、「長老さま。」と言へば、「留守ぢや。」と申す。「はるばる参りたるに御残り多いこと。」とてしばらくやすらひけるに、をりふし竹の子の時分なれば、やぶをのぞきまはれば、長老さまは、みごとなるかりの毛をむしりてござある。そろりとそばへ寄り、お見まひに参

りたるよし申せば、長老仰天して、さてさて、この鳥のむく毛をまくらに入れさふらへば頭風の葉ぢやと申すほどに、かやうにいたすが、なにとしても手慣れぬことはならぬものぢやと仰せらるる。だんな聞きて、「それはやすいこととござある。これへ下されよ。」とて、くるくるとひきむしり、毛をば押し寄せて、「御まくらに御入れさふらへ。」とて、「この鳥の身はこなたにいらざるものよ。」とて、やがて取りて帰り、賞翫す。

* 1 長老 〓 和尚。 * 2 をりふし 〓 ちようど。 * 3 かり 〓 雁。ガン。 * 4 頭風 〓 頭痛。 * 5 賞翫 〓 おいしく味わって食べること。

（『きのふはけふの物語』）

10

★ 問一 —— 線部「仰せらるる」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 動作主はだれですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 長老 イ 筆者
- ウ ある人 エ 世間の人

(2) 「仰せら」れた言葉はどこからどこまでですか。初めと終わりの四字を文中から書き抜きなさい。

--	--

問二 「長老」は「ある人」にどんな気持ちを持ったと思われれますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 「ある人」に弱みをにぎられ、してやられたことがぐやしい。
- イ 「ある人」にむく毛をやらなかったことがぐやまれる。
- ウ 「ある人」に仕事を手伝ってもらってありがたい。
- エ 「ある人」と一緒に仕事ができうれしい。